

ジェイン・オースティンの小説における オトギ話的要素について

久 米 清

ジェイン・オースティンの作品にオトギ話的要素があるということは、格別突飛な意見ではなく、すでに何人かの批評家がいっていることであります。例えば Sheila Kaye-Smith⁽¹⁾, Aldington⁽²⁾, D. W. Harding⁽³⁾ などがそうです。しかし、いずれも断片的な感想であったり、他の問題との関連で述べている程度なので、この問題について考えてみることは無意味ではないと思います。特にオースティンの作品の中にオトギ話的要素がどのように存在しているのか、そしてそれはどのような意味を持っているのか、の二点について考えてみたいと思います。

まず第一に、オトギ話の書き出しは、昔ある所に美しいお姫様がいました、という書き出しでなければなりません。

Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition, seemed to unite some of the best blessings of existence; and had lived nearly twenty-one years in the world with very little to distress or vex her⁽⁴⁾.

この *Emma* の書き出しはまさにそのようなものであります。

第二に、そこへ王子様（これはつまり、財産家で女性よりも身分の上の独身の男性という意味ですが）が現われ、目出度くハッピー・エンドになり、‘living happily ever after’ ということにならなければなりません。これは特に Cinderella theme といっていいいでしょう。‘a single man in possession of a good fortune’⁽⁵⁾ が登場して、周囲がその男性を獲得しようとどよめく、*Pride and*

Prejudice の冒頭もシンデレラを想像させますし、この作品の他に、*Northanger Abbey* も、*Mansfield Park* も、身分が相当上の男性と目度くハッピー・エンドになります。*Emma* の結びの言葉は、‘the perfect happiness of the union’⁽⁶⁾ ですし、*Northanger Abbey* は、‘Henry and Catherine were married, the bells rang and every body smiled...’⁽⁷⁾ とつづいて最後に ‘perfect happiness’⁽⁸⁾ という言葉が矢張り使われております。*Pride and Prejudice* ではヒロインが最後に、‘I am the happiest creature in the world.’⁽⁹⁾ といえますし、*Mansfield Park* の末尾は次のようであります。

With so much true merit and true love, and no want of fortune or friends, the happiness of the married cousins must appear as secure as earthly happiness can be. —⁽¹⁰⁾

第三に、虐待されていた——とまではいかなくとも、少くとも大切にされていなかった——末娘、あるいは継娘が結局最後は他の姉妹たちを出しぬいて、目度くハッピー・エンドになる、という同じくシンデレラ的なプロットがうかがわれます。*Mansfield Park* のヒロイン Fanny は両親ともそろっていませんが、生活の困窮のために、母の姉の Lady Bertram の家にひきとられます。そして Bertram 家の二人の娘と一緒に育てられますが、何かと差別され、皆がパーティに出かけても、一人残っていたり⁽¹¹⁾、みんなが招待されて出かけ、あとに残り、仕事に精出し、疲れたので、ソファーに横になっていると、叔母の Mrs. Norris にひどく叱責されたり⁽¹²⁾ するあたり実にシンデレラ的であります。*Persuasion* のヒロイン Anne も三人姉妹の中でもっとも軽んじられています。

... Anne... was nobody with either father or sister: her word had no weight; her convenience was always to give way;—she was only Anne.⁽¹³⁾

第四は、ヒロインの親、特に母親がすでに亡くなっているか、生きていても知性その他の面でヒロインよりはるかに劣り、ヒロインに対する影響力がな

く、いないのに等しいということでもあります⁽¹⁴⁾。これはオースティンのすべての作品に共通する特徴で、この点について、以前に、近代的自我の確立と封建的な親の権威の衰退として論じたことがあります。オトギ話との関連で考えれば、ヒロインの活躍をきわだたせるために、といえるのではないのでしょうか、また親がいないか、無力であるということは、そのために *Mansfield Park* の Fanny のように、親類の家に世話にならなければならなかったり、*Persuasion* の Anne のように、大事にしてくれる母がいないため、家の他の者に軽んじられたり、という結果をもたらし、結局第三番にあげた要素を生み出す働をもしていることとなります。

第五に、オトギ話のヒロインは、第三、第四で述べたように、虐待されたり、大事にされなかったり、また、片親が欠けていたり、無いに等しいような親であったりするにもかかわらず、彼女自身はそのような環境により性格が歪んでいたり、理解力がとぼしかったりせず、それどころか、charming で agreeable で sensible でなければなりません。オースティンの作品のヒロインはまさにそのようであります。

第六は、少々思いつきのですが、'Beauty and the Beast' という有名なオトギ話の echo が見られるように思われます⁽¹⁵⁾。それは *Pride and Prejudice* の Elizabeth と Darcy の関係です。もっとも Elizabeth を美女と呼ぶことは少々躊躇しますし、ましてや Darcy を野獣と呼ぶのはあまりにもひどすぎるでしょうが、しかし Elizabeth は魅力ある女性ですし、Darcy は最初、'He was the proudest, most disagreeable man in the world, and every body hoped that he would never come there again.'⁽¹⁶⁾ とみんなから思われ、一人超然としているあたり、少々野獣的傾向がないでもないように思われます。また、Jane と Bingley の間柄を、自分の判断で引き裂く強引さにも、さらに、自分の心の中での葛藤の末、押え切れなくなった時、相手の気持を考えず、プロポーズする唐突さのうちにも、野獣的なものを感じないわけにはいきません。人当りがよく、人間関係を気にする現代的な人間とまさに対照的で

あります。そしてこのように Darcy にプロポーズされた時、Elizabeth は次のように云います。

... your manners impressing me with the fullest belief of your arrogance, your conceit, and your selfish disdain of the feelings of others, were such as to form that ground-work of disapprobation, on which succeeding events have built so immovable a dislike; and I had not known you a month before I felt that you were the last man in the world whom I could ever be prevailed on to marry.⁽¹⁷⁾

とにかく、相手は野獣なんだから、もっとも結婚したくない人だといわれるのももっともです。ところが、いくら野獣でも、こんなにも愛してくれていたとは、と思うと Elizabeth の心は動揺させられます。それとともに野獣も、愛情の力によって、自己変革を行ない、野獣から王子様へと変身します。この野獣から王子様への変身という所にも、この「美女と野獣」というオトギ話のプロットが現われています。

以上述べてきたように、いくつかのオトギ話的要素がオースティンの作品にあると考えられますが、このような要素は実際に作品の中でどのような働きをしているのでしょうか。

まずそれは何よりも作品に、明るい、楽天的な雰囲気にあたえています。ハッピー・エンド、それも特に身分の低い女性が、身分の上の男性と目出度く結婚するという点にしろ、虐待または大事にされていない末娘が成功するという点にしろ、親がいなか、いてもいないに等しいほど頼りにならない親であるにもかかわらず、その子は断然素晴らしいという点にしろ、愛により野獣が王子様に変身するという点にしろ、すべてオトギ話的要素は、それこそ人間が望むことであり、人間が望むことはオトギ話においてはすべてかなえられるわけですから、明るく、楽天的にならざるをえないわけです。それはオトギ話の性質からくるもののようです。Susanne K. Langer は次のように云っています。

Fairy tale is a personal gratification, the expression of desires and of

their imaginary fulfilment, a compensation for the shortcomings of real life, an escape from actual frustration and conflict.⁽¹⁸⁾

また、Baker は reality を romance と対照させて同じようなことをいっております。

“Reality,” of course, is essentially “seeing things as they really are”, and romance is “seeing things as we wish them to be.”⁽¹⁹⁾

このように人間の夢や願望が充足される話はたしかに興味があり、人を魅了するものであります。

...In *Pride and Prejudice*, the reader's satisfaction is considerably enhanced by the knowledge that the bridegroom has a substantial income and will take his bride to a fine house, surrounded by a park, and furnished throughout with expensive and elegant furniture.⁽²⁰⁾

W. Somerset Maugham がここで云っていることも、結局、オースティンの作品の、このようなオトギ話的魅力についてではないでしょうか。

オースティンの作品の中に、このようなオトギ話的魅力が存在することは確かでしょうが、しかしそれは果して魅力であるといって手離しで喜こんでおられるのでしょうか。つまり人間の夢や願望の表現がそのまま近代小説として通るかかどうかということです。近代小説の近代小説たるゆえんはそのリアリスティックな傾向にあることはいうまでもないことでしょう。もし、オースティンの作品が単なる人間の願望の表現にとどまっていたら、小説とはいえないでしょう。しかし実際はそうではなく、オースティンの作品がリアリズム——リアリズムとは何かという問題は別として——の方向を指向していることは今更いうまでもないことでしょう。問題は今までに述べてきたオトギ話的要素と、リアリスティックな要素との関係がどうなっているかという点であります。結論的にいえば、オトギ話的要素が、それだけ独立していず、それがリアリティーにより裏付けられているということです。ハッピー・エンドにいたる過程、つま

り、身分の上の若者が、身分の低い女性と結婚にいたる過程でも、Darcy の場合に見られるように、何の矛盾もなく、サラットうまく行くわけではなく、Darcy の叔母の Lady Catherine の干渉をはねのけたり、Darcy 自身が、身分が上であることに対する pride と身分の低い者に対する love との葛藤に打ち勝たねばなりませんでした。そのようなリアルな過程を経た上でのハッピー・エンドであったわけです。その他、Anne の場合でも、Catherine の場合でも、妖精や魔法の力でハッピー・エンドになるのではなく、自分たち自身の非常な努力と分別によってハッピー・エンドをかちえるのです。そこにリアリティーが存するのです。

大事にされない末の子がハッピー・エンドにいたる、という点は、大事にしない側の人々が劣った人であれば、すぐれた末の子がハッピー・エンドにいたるの自然で、この点は問題ないのですが、むしろそのような歪んだ環境の中にありながら、その影響を受けず、すぐれたヒロインが現われるという点は、リアリティーの観点から大いに問題とされるところでありましょう。この点についても、オースティンは相当程度にリアリティーの裏付けを用意しております。Anne は父と姉は劣っているけれども、亡くなった母はすぐれていた、とか、Fanny の場合は、幼い時から叔母の家に引きとられ、次男の Edmund に読書その他の教育を受ける⁽²¹⁾とか、種々の手は打ってあります。

このようにリアリティーの裏付けがあるために、オトギ話的要素、例えば、先に引用した、*Emma* の冒頭、‘Emma Woodhouse, handsome, clever, and rich...’ や結びの、‘the perfect happiness of the union.’ という言葉は一種のパロディー的意味を持つことになります。つまり Emma は欠点も多く、失敗も重ねるので、とても clever とはいえないし、そのような不完全な Emma が結婚をしても、その後でも同じように失敗を続けるだろうので、とても perfect happiness とはいえないであろう、ということをおースティンも知っていたし、読者も知らされるので、そこにパロディーが生ずるわけです。*Northanger Abbey* の末尾、‘Henry and Catherine were married, the bells

rang and every body smiled.’ も、Henry の父が二人の仲をなかなか認めず、結局、Henry の妹が相当の身分の人と結婚できたため、父が上機嫌である時にやっとなんとか許されるのです。‘... his permission for him “to be a fool if he liked it!”’⁽²²⁾ という程度にすぎません。まさに ‘every body smiled’ の逆であります。そこにパロディーが生じます。

このように見てきますと、オトギ話はリアリズムによってパロディー化される対象としてのみ存在しているようではありますが、かならずしもそうではなく、オトギ話はオトギ話として存在し続けています。そしてそれは、*Persuasion* や *Mansfield Park* のハッピー・エンドに説得力が乏しいことにも現われているように⁽²³⁾、作品の主題を充分展開することをさまたげ、オースティンの作品を歪めるマイナス面をもちながらも、全体としては、近代的なリアリズムの立場から、意識的に使用されており、ロマンス的なものとして、作者の批判の対象となっています。しかも、その魅力はそのまま保存され、新しい光をあげて、鮮やかに輝いている点が彼女の文学の特質となっているように思われます。

Jane Austen, through her final irony, implies that she knows and we know that perfect felicity is unobtainable in this life, that love will change and youth grow old—but that we all enjoy the illusion of romance; we like to think of “living happily ever after.”⁽²⁴⁾

Baker はこういったあとで、さらに ‘Romance is useful.’ と断言しております。つまり、オトギ話が有益であり、それが人間の夢であり願望であるならば、それを除外するのではなく、それを含み込むことこそ真のリアリズムではないでしょうか。George Lukács が、

The central aesthetic problem of realism is the adequate presentation of the complete human personality.⁽²⁵⁾

とっておりますが、オトギ話が「流れる水のように太古から悠久の流れを続

けて」⁽²⁰⁾ きた人間性の一部であるならば、それを含んでこそ complete human personality は呈示できるのではないでしょう。オースティンのリアリズムはそのようなもののようです。

註

- (1) Sheila Kaye-Smith & G. B. Stern, *Talking of Jane Austen* (Cassell & Co. Ltd., 1950), p. 7.
- (2) Richard Aldington, *Jane Austen* (The Ampersand Press, Pasadena, California, 1948), p. 8.
- (3) D. W. Harding, "Regulated Hatred: An Aspect of the Work of Jane Austen," *Scrutiny*, March, 1940, p. 355.
- (4) *Emma, The Oxford Illustrated Jane Austen*, Vol. IV, ed. by R. W. Chapman (Oxford, 1952), p. 5.
- (5) *Pride and Prejudice, The Oxford Illustrated Jane Austen*, Vol. 11, p. 3.
- (6) *Emma, op. cit.*, p. 484.
- (7) *Northanger Abbey, The Oxford Illustrated Jane Austen*, Vol. V, p. 252.
- (8) *loc. cit.*
- (9) *Pride and Prejudice*, pp. 382~383.
- (10) *Mansfield Park*, p. 473.
- (11) *Ibid.*, p. 35.
- (12) *Ibid.*, p. 71.
- (13) *Persuasion, The Oxford Illustrated Jane Austen*, Vol. V, p. 5.
- (14) D. W. Harding, *op. cit.*, p. 361.

This avoidance may seem strange, but it can be understood as the precaution of a mind which, although in the Cinderella situation, is still too sensitive and honest to offer as a complete portrait the half-truth of the idealised dead mother.

- (15) Baker は Austen についてではなく、Samuel Richardson について、"He had domesticated the ancient romantic fairytale of Beauty and the Beast..." といっています。
("Sheridan Baker, The Idea of Romance in the Eighteenth-Century Novel", *Studies in English Literature*, English Number, 1963, The English Literary Society of Japan, p. 54).

- (16) *Pride and Prejudice*, Vol. II, p. 11.
- (17) *Ibid.*, p. 193.
- (18) Susanne K. Langer, *Philosophy in a New Key* (A Mentor Book, 1948, 1964), p. 152.
- (19) Sheridan Baker, "Reality and Romance in *Northanger Abbey*," *Mulberry*, English Number, 1962, The English Literary Society of Aichi Women's College, p. 12.
- (20) W. Somerset Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (William Heinemann Ltd., 1954), p. 64.
- (21) *Mansfield Park*, p. 22.
- (22) *Northanger Abbey*, p. 250.
- (23) Marvin Mudrick, *Jane Austen, Irony as Defense and Discovery* (Princeton University Press, 1952), p. 169.
- (24) "Reality and Romance in *Northanger Abbey*," *op. cit.*, p. 15.
- (25) George Lukács, *Studies in European Realism*, (London, Hillway Publishing Co., 1950), p. 7.
- (26) 土方辰三『文学の源をたずねて』, 河出書房発行, 昭和30年, p. 120.
(この論文は, 1964年10月, 静岡大学で行なわれた第17回日本英文学会中部地方支部大会で発表したものを整理したものです。)